

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日印刷
平成二十四年三月一日発行
第百十五卷第三期

ホトトギス

三月号



俳句随想 〔三百五十七〕

汀子

天地有情の裏にある通信欄のご質問は出来るだけお答えしたいと思つて読ませて頂く。お便りもある。難しい質問があつても私の考えで答えさせて頂くのでご承知頂きたい。「秋天のかすむ」としたのですが「かすむ」は春の季題で合わないと言われたのですが、霧では山は見えませぬので漢字ではなく仮名の「かすむ」としました。と書かれてあつた。霧、霞、靄などの自然現象には、季題として秋の「霧」春の「霞」がある。何れも水滴によつて出来る現象であるが、昔は厳格に「霞」は春、「霧」は秋と限定されていなかったと広辞苑に書かれてある。現代は俳句の季題として春は「霞」秋は「霧」とされているが何も季題として取り上げない使い方もあるであろう。秋は空気が澄んでいるが、霞むこともあるであろう。それを「霧」と言わねばならないことはないと思つている。

作者が漢字を使わずに仮名で表現したのはいいと思う。「霞」と書けば春の雰囲気になるが、その現象を「霞」とか「霧」とか作者がそう思つたならそのような表現をすればいいと私は思つている。北海道の太平洋側に六月頃湧く霧を「じり」という。瀬戸内海は秋に「海霧」が湧くのを「ガス」と言う。歳時記会議で苦肉の作として「じり」と平仮名に納めた。

句日記 汀子

平成二十三年三月二日 ロイヤル俳壇

斑雪さへも失せたる朝かな
撒いてみる何の物種かは忘れ
難飾りありしロビーを抜けて来し
春光にひそむ季節のあともどり
これよりの寒さは春のものとして
難飾るための一と日でありしかな
三月五日 芦屋ホトトギス会

六甲の山の消息春の川
知らぬ間にここだもの芽なりしかな
踏み迷ひたる春泥を踏みて行く
三月六日 下萌句会

啓蟄に雲の動かぬ一と日かな
水音をへだてし玻璃戸水温む
かかはりのなき如くあり大試験
三月八日 大阪倶楽部

炉塞ぎて心もとなき家居かな
春めくや置き替へてみる調度品
告げられし訃報に春のあともどり
炉塞ぎてみれば乱雑なる机上

み吉野の旅の近づく西行忌
三月八日 綿葉倶楽部
こんなにも暖かさうと見ておしに
暖かく見えて玻璃越なりしかな
三月十日 清交社
踏青の歩を引返す処かな

氣のつけば土筆の原でありしこと
目刺焼き加減にありし好き嫌ひ
摘んでみしだけがこんなに土筆かな
踏みさうに踏みさうに摘む土筆かな
まほろばの大地すなはち土筆の野
この道を行けば着く筈青き踏む
三月十一日 工業倶楽部

蜆汁温めなほして旅帰り
波音の届かぬ二階蜆汁
暖かくないと言ひつつ出掛け来し
三月十五日 有恒倶楽部

釣好きに若鮎の句来りけり
飾りたる難に待たるる会二つ
連絡のとれねば難に托すこと
流さるる難に托さん祈りあり
水音の集まるところ水草生ふ
三月十五日 無名会

雁風呂を焚きくるとして旅の宿
旅人のくつろぐ宿の雁風呂に
遠き子に消息伝へ難の宵
大地震の今宵雁風呂焚かれずに
壊滅の大地に春の祈りあり
春の地震旅の予定の取り止めに
春の地震大地の怒りをさまらず
三月十六日 夏潮句会

修羅場なる大地よ祈り深き春
津波避けられぬ大地よ耕せる
難飾りつつ地震鎮めたまへかし
かけがへのなき命もて耕せり
三月十八日 時雨句会投句のみ

放射能洩れてはならじ冴返る
なすべきかなさざるべきか冴返る
難に留守あづけて旅にありにけり
失ひしもの大きき春の地震
春寒といふ綺麗ごとなど言へず
なすすべのなき人々よ冴返る
三月二十四日 きさらぎ会

冴返るばかりや地震をさまりて
次々と災害を呼ぶ春寒し
治饗酒や禁酒の杯を高く上げ
人の世の耐へねばならぬ春の地震
貝寄風に乗りに便りの届きたる

貝寄風に乗りに便りの届きたる

廣太郎句帳

廣太郎

三月十日 土筆会

如月や東京タワー低くなり
若鮎に広き夙川芦屋川

その中に彼に似し人脱参
蝮の道明日へ伸びてゆきにけり
三月二十七日 野分会東京例会

平成二十三年三月三日 蕉心会

癒えし目にスカイツリーは暖かし

三月十一日 東日本大震災勸発 十二、十三日関東ホ
トトギス俳句大会 十九日ホトトギス社吟行会 二十

三月二十八日 朝日カルチャー若草句会

春の川未だ奏でるには固し
春の川水尾尖んがつてをりにけり

六日句会と講演の会及びホトトギス社句会は中止。

三月二十八日 朝日カルチャー若草句会

啓蟄を遮つてゐる水の黙

三月二十二日 若水句会

鴨引いて湖面虚しくなりにけり
黄水仙咲かせ無人の大使館

水温む前の呻きでありにけり
スカイツリー長閑に世界一となる

春障子創世記めく光かな
阪急宝塚駅の花董

鴨引いて行く大地震を見下して
涅槃図の嘆き彼の地へ彼の人へ

落つるまで空と交信する椿

董野に放つ子犬の行方かな

外つ国の香りを乗せて黄水仙

三月四日 カトリック新聞選者吟

聖遺物淑氣とともに安置され

あたたかや関西人と判るわり
指揮棒の先より生るる音ぬくし

三月二十九日 草木瓜会
物芽出づ日本列島揺さぶりて

三月五日 明石の春を詠む吟行俳句会

鮎子の大漁らしき吃水線

春障子外つ国の塵纏ひつつ
暖かき心は彼の地へと馳せて

もの芽を見付けしよりの未来かな
水流れ地球は回り物芽出づ

三月六日 野分会芦屋例会

数多なる命を秘めて山笑ふ

三月二十三日 目黒学園句会
山の神ほほゑみ存在す春祭

磯城島に未来は確と物芽出づ

六甲山へアピんカーブより笑ふ

水平ら水底平ら蝮の道

地虫出づ稲畑汀子邸の芝木霊より神を迎へて春祭

雑詠句評（二月号より）

りも、胸にある発音器官が鳴るのだが、それぞれの種類によって特徴がある。秋の蟬の代表のひとつでもある「法師蟬」の鳴き声は「つくつくぼうし」と表現される事が多いが、それを「祈り」と捉えた作者の感性が素晴らしい。（廣太郎）

山霧のポストに落とす昏き音 神戸 山田佳乃

平地の霧と違い山霧は、時に襲ってくるかのように身に纏う物だけでなく心まで濡らして過ぎてゆく。そんな山霧に佇んでいるポストに一本の便りを投じたとき、低く暗い何とも言えない音が作者の心に残ったのである。その「昏き音」を醸し出したのは、決して明るく楽しいものとは言えない便りそのものの中身だったのかも知れない。先を閉ざしている山霧がもたらす不安感と物語性を一本の便りに語らせている巧みな一句である。（しげ人）

霧の深い中、郵便ポストに投函する音か、家のポストに郵便物が入られる音か、何れにせよ山の中の霧の深い静かな中、郵便物がポストに入れられる、という微妙な音が見事に景とマッチしている句である。それを聴覚的な言葉ではなく「昏き」と、視覚的なイメージで捉えたところも見事である。（廣太郎）

（以下略）

法師蟬声の終りは祈りめく 神戸 長山あや

法師蟬という名には、僧とか仏法とかのイメージがまとわり付いている。凋落の兆しが見えはじめた山野に法師蟬の鳴く声を聞くと、誰でも一抹の寂しさを感じるものである。しかし更に作者は、ツクツクボーシと鳴いたあとの終りのジーと尾を引くような声を、「祈りめく」と感じとった。まさに「声の終り」は、仏法に帰一せんとする法師蟬のひたすらなる祈りのように思えたのである。生命あるものの普遍的な思いを、法師蟬に託した高度な内容のある句である。（仁義）

蟬は種類によって様々な鳴き方をする。厳密には、声というよ

仁義・しげ人・昭代
暮潮・佳乃・くに彦
一步・純也・比奈夫
雅・廣太郎

天地有情

水子選

金色の星銀色の虫の声 東京 稲畑廣太郎
 蝸の山氣に濡れてゆく音色 同
 罹災地の子等に兎の棲める月 仙台 小島左京
 余震余波あれど浄土ヶ浜に月 同
 露の世の二人きりとは汝と我 相模原 木村享史
 諷詠の道の夜学に終りなし 同
 露けしや移民の悲話を聞くことも 京都 安原 葉
 爽やかに移民の誇り語らるる 同
 走る気はさらさらなくて運動会 熊本 岩岡中正
 こだましてビルの谷間の運動会 同
 聞き馴れし雪の立山風の盆 神戸 後藤比奈夫
 影絵でもおわら踊はおわらの手 同
 月上る空と離れて星の空 徳島 上崎暮潮
 近き雲遠き雲ある夕焼かな 同
 己が鳴く声に鳴き継ぎある小鳥 吹田 宮崎 正
 りんご食む良き歯の音を聞いてをり 同
 一本の光の通る黄葉道 奈良 古賀しぐれ
 掃く音の踏む音の暮れ落葉道 同

浪音の霧に茫々たる琵琶湖 樺原 稲岡長
 茫々の湖霧といふ包むもの 同
 鮎落ちてしまへば杣も来ぬ築辺 神戸 三村純也
 露けしや案内にその名ありながら 同
 見るよりも富士はあるもの野菊咲く 熱海 嶋田一步
 旅に出てこそその出合ひや菊日和 同
 落葉駆ける音街騒に加はりし 同 嶋田摩耶子
 風が梳きし黄葉のあとに空嵌り 同
 菊月の忌に参じ得ぬ身ひとつ 東京 今井千鶴子
 月の夜は案山子も稲も月の色 同
 秋惜むうす紫に富嶽暮れ 小金井 武井良平
 箱根路や曲り曲りて秋惜む 同
 断崖の天裂いて来し隼よ 箕面 井上浩一郎
 雨音や人にも秋の深みゆき 同
 すぐそこといふ距離遠し草の花 宝塚 水田むつみ
 まなざしの親しげに寄る鹿の息 同
 連峯の主峰初日に染まり染む 横手 伊藤とほ歩
 乗初はスキーリフトでありにけり 同

天地有情句評

汀子

露けしや移民の悲話を聞くことも 京都 安原 葉

移民の悲話を聞く真摯な作者。

走る気はさらさらなくて運動会 熊本 岩岡中正

雰囲気を楽しむ運動会。

聞き馴れし雪の立山風の盆 神戸 後藤比奈夫

風の盆に寄せる思い。

月上る空と離れて星の空 徳島 上崎暮潮

月明りに消えてゆく星空。

りんご食む良き齒の音を聞いてをり 吹田 宮崎 正

歯学部名誉会長ならではの捉え方。

金色の星 銀色の虫の声 東京 稲畑廣太郎

色に譬えれば……。詩情が深い。

罹災地の子等に兎の棲める月 仙台 小島左京

夢を持って欲しい罹災地の子供たち。

露の世の二人きりとは汝と我 相模原 木村享史

いま改めて頼る二人。